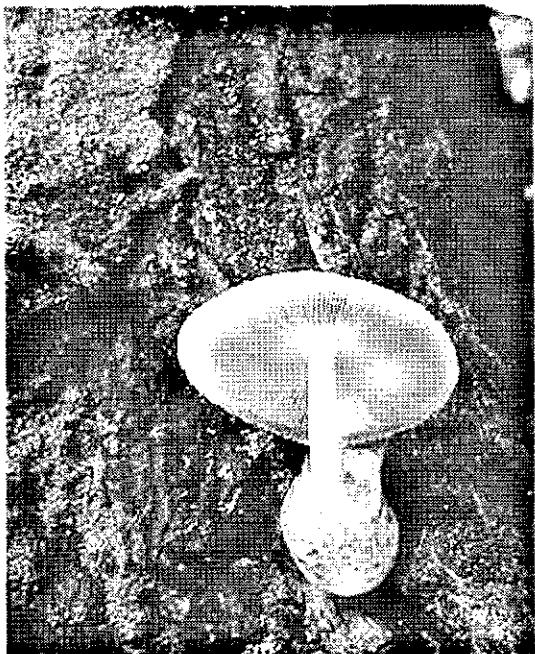


横山 元  
gen yokoyama



キヌオオフクロタケを最初に観察したのは、埼玉県立自然史博物館近くのケヤキに発生していたものだった。ケヤキはまだ朽ちていないのに、なぜここにキノコが発生したのか不思議に思えたのである。よく見ると外樹皮にあいていた小穴から、キノコが生えているのがわかった。キノコの周辺にはアリ道の土トンネルがあり、別的小穴からはアリが出入りしているのが見られた。キノコが発生した小穴も、アリが開けたに違いない。樹皮は生きていても、アリが出入りしているので木部が朽ちていて、そこからキノコが生えたのだろうと、その時は思っていた。次にキヌオオフクロタケを観察出来たのは、自宅近くの公園の雑木林であった。エゴノ

キの立ち木の一部朽ちたところに発生していた。キノコ周辺には前回と同じようにアリ道のトンネルがあり、木部がアリの住みかとなっているのが一見してわかった。このエゴノキには2年続けてキヌオオフクロタケが発生、いずれもアリ道のトンネルがエゴノキの樹皮にあり、朽ちた内部はアリの巣だった。生きている樹皮と朽ちた木部の境目にキヌオオフクロタケが発生していた。これら2か所の観察で、キヌオオフクロタケはアリとの関わりがあるのではないかと思えたのである。しかし、今までにアリとの関わりは読んだことも聞いたこともなかった。図鑑等で調べてもキヌオオフクロタケの生態写真そのものが少ないのである。

伊沢正名氏が撮られたキヌオオフクロタケが山溪フィールドブックスの「きのこ」、「日本のきのこ」に掲載されている。写真で見る限りアリの存在は確認できなかったが、アリが生活したような、こん跡があるように見えたのである。キノコの撮影は、そのキノコの特徴をわかりやすく、きれいに表現するためキノコ周辺の余分なものを整理するのを常としている。伊沢氏にお会いした際には是非、アリ等についておうかがいしたいと思っている。数あるキノコ関連のホームページでキヌオオフクロタケを検索したところ、「仙台きのこ同好会」に画像が掲載されていた。ここまで記したことすべてが一枚の写真に凝縮されているような、私にとってはすばらしい写真を大発見したのだった。キヌオオフクロタケのそばにはアリ道のトンネルが写し込まれており、この写真でアリとキヌオオフクロタケの関わりを十分に確信した。ではなぜ、ア

リの巣周辺にキヌオオフクロタケが発生するのだろうか。熱帯雨林のハキリアリの場合は巣に葉材を運び込み、菌糸を増殖し利用している。キヌオオフクロタケは、アリの生活で朽ちた広葉樹がキノコに適応しやすい環境に変化したため、菌が延びキノコが発生したと考えられる。アリの意思や行動によって発生させたのではなく、アリの生活によって変化した環境がキヌオオフクロタケに適した場所だったのである。この写真ではわかりにくいが、アリがキノコにたかっていた。食しているように見えなかったし、他のアリたちもキノコに特別関心あるよう

には見えなかった。アリの営巣付近では、食べかすや排せつ物からと思われる一種独特の臭いを放っている。明らかに朽ちた材とは違った臭いなのである。アリが生活を営むことによってどのように変化するのか詳しいことはわからないが、これらもアリが朽ちた材をキヌオオフクロタケが住み着きやすくした素因と考えている。私が観察した2か所延べ5例と、「仙台きのこ同好会」の一枚の写真が、キヌオオフクロタケは、「アリの巣周辺から発生する」ことが定説となり得るのか、ただの「偶然の一致」と一蹴されるのか、大いに興味あるところである。

## information

### キノコの展覧会予告

写真で見るキノコ、標本のキノコたち

## 多摩丘陵75種の「身近なキノコたち」

期 間：2001年（平成13年）5月5日～5月9日

場 所：旧多摩聖蹟記念館内（都立聖蹟桜ヶ丘公園）

時 間：AM 10:00～PM 16:30

●写真撮影／池田和加男 ●標本制作／菊地栄子 ●解説／矢部和子

ただいま  
準備中！

会員の池田さん、菊池さん、矢部さんによるキノコの展覧会が開催されます。きのこへの愛情が溢れると評判の池田さんの生態写真に加え、情熱なら誰にも負けない菊地さん、矢部さんの強力コンビによる企画、構成の「きのこ展」です。3人がフィールドワークとされている多摩丘陵のきのこたちはどんな姿を見てくれるのでしょうか。乞うご期待！

詳細は次号が予定通り（？）出ればくわしくお知らせする予定です。